

資本の物象化と労働者の陶冶—アソシエーションの主体の形成の社会的条件

本論は、いかに『資本論』において、いかに物象化をつうじて自由な生産者のアソシエーションの担い手として労働者が形成・陶冶されるかが明らかにされることを示されることにある。従来は商品と貨幣の物象化の研究と比較して資本の物象化の研究は立ち遅れていたように思われる。資本の物象化に注目されるさいにも、そのもとで労働者が、新しい生産体制の主体として陶冶されることが明らかにされず、資本の物象化は、労働者を支配する宿命的なものとみなされがちであった。このため、資本の物象化を、『経済学・哲学手稿』で示される労働の疎外と対比し、後者に労働者の主体的側面を求める論者が登場した。しかし、資本の物象化は労働の疎外の諸側面を具体的に示しており、マルクスもそれをしばしば疎外とも表現している。疎外をつうじた労働主体の陶冶を資本の物象化をつうじた陶冶と捉え返すことによって、資本主義経済の客観主義的理解の一面性も労働主体の抽象的な主観主義的理解の一面性も克服することが可能となる。

資本主義経済においては物象化は商品・貨幣の疎外から始まり、生産過程における資本の物象化へ進展し、さらに資本の流通過程、資本の総過程へ及ぶ。資本の物象化は資本家と労働者との関係の転倒的現象であるが、そこにおける階級関係（剰余価値の搾取）を隠蔽する点でも転倒的である。この転倒性は資本の流通過程、総過程においてはいつそう強まる。このことを暴露することが『資本論』全体の基本目的の一つであった。

マルクスは資本主義経済体制に替わる新しい体制を「自由な生産者のアソシエーション」と呼び、その構成諸要素が資本主義経済自身の内部で準備されるとみなす。アソシエーションは資本の物象化に対抗するものであるが、アソシエーションの担い手も資本の物象化のもとで陶冶される。資本主義的生産過程における資本の物象化の核心は、多数の労働力の結合（社会的結合労働力）が物象化され、資本に属すかのように現象することにある。アソシエーションの実現のためには、物象化された結合労働力を労働者の自発的結合のもとにおく必要があるが、そのための労働者の能力もこのような物象化のもとで形成、準備される。「社会主義」の失敗の基本原因の一つはこのことの看過にあるともいえる。